

夕間、虚空に驚嘆する。

展望、斯く為るが炯々の色彩に在り、さりとして嬋娟と渾名するに與はず。

月景嫋嫋たる事僅かに過剰ぬ、尾の引くが如し。

一人の壮年、其の夕間に筆策を持ち、屋外にてその情を綢繆恋恋の旋律に暗喩せり。

その顔、立派なる両髭より何所か??とした益有り、齡持ってして還暦の輪廻を舛馳したと捉ふる。

筆策の腕得てして凡愚より姚冶の面子に基づいて其れが兀然と抜本している能はず。

しかし持ってして、小人の交わりは甘きこと醴の如し、故に枳棘は鸞鳥の棲む所に非ず。

今宵も、壮年の紡ぐ旋律が、門前の堰塞たる松と戛然と響き合う...

×

又津の屋敷によろこそ...







投稿

[??????????](#)